

交換留学生向け「グローバル化支援インターンシップ」 — 留学生の異文化性と日本社会の地域特殊性 —

恒松 直美

はじめに

本稿では、2012 年度に新たに開講した広島大学短期交換留学プログラム（HUSA プログラム）¹向け「グローバル化支援インターンシップ・コース」に焦点をあて、交換留学生向けインターンシップを開拓し発展させるうえで不可欠となる日本社会の地域特殊性の理解と交換留学生インターンの異文化性がもたらすインターンシップの意義と発展の可能性について論じる。2011 年度のパイロット・スタディにより、交換留学生と大学外の実社会とを連携していくためには留学生インターンが日本社会の価値観を理解することが重要であると認識できた。さらに、インターンシップにおいて留学生が持つ文化の多様性を生かす意義について考察する機会を持った。²日本の地域社会で機能する行動様式に対応し、地域の人々から信頼を得、つながりを築けるかどうか、交換留学生向けインターンシップを実現し持続する鍵であると言っても過言ではない。

留学生の日本語能力と日本文化の理解の重要性は、外国人留学生の就職支援に関する研究で日本企業が重要視する項目として指摘されることが多い。本稿では、交換留学生向けインターンシップ授業の実践において、日本語能力と日本社会への対応能力がどのように必要となるかを事例に基づいて考察し、その環境において多様な価値観を背景に持つ交換留学生の特性を生かす方法について探る。日本人特殊論については、比較なき日本人論に関する批判的研究（杉本・マオア：1995）を含め、「日本的」特性の独自性の強調に関する立論の問題性についての論説（木村：2009）もある。本稿では、日本社会における行動様式を、日本的行動特性の独自性を強調する立場からではなく、ある一つの行動様式として捉え、日本の地域社会で実際に期待される行動様式が、交換留学生インターンシップにどのように影響を与えるかに焦点をあてて議論を進める。³

¹ 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。24ヶ国に渡る66大学とUSAC (University Studies Abroad Consortium)及びUMAP (University Mobility in Asia and the Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結している(2012年12月時点)。「HUSA プログラム」に参加している留学生を本稿では「HUSA 留学生」と記載する。

² 恒松(2012a, 2012b) 参照。

³ 本稿の焦点は、日本人の行動・思考様式の独自性の有無や日本的な行動様式が特異性をもつかどうかについての議論ではない。外国人が日本の地域社会で実際にインターンシップをする上で必要とされる行動様式をある一つの行動様式として位置付け、それに対し、留学生インターンシップを現実的に機能

交換留学生を広島大学のおかれた日本の地域企業と連携させながらインターンシップ授業を構築する際、ビジネスレベルでの日本語能力と日本企業での慣習の理解が前提としてある。本授業を地域社会で機能させ継続させていくためには、本授業を機能させる文化的機軸について担当教員が明確な指針を持ち授業を行う必要があることがパイロット・スタディから認識できた。日本語と日本文化を学ぶことを主な目的として広島大学に留学してきた交換留学生⁴が、日本社会についての理論的理解を日本の地域社会における実践的学びと関連づけて授業を構築していくにあたり、教員の省察的实践が必要となる。

2003年度から2011年度まで広島大学短期交換留学生向け「HUSA インターンシップ」を開講してきたが、その授業をパラダイム転換し、エンパワーメント理論に基づき、2012年度後期（秋学期）に新たに「グローバル化支援インターンシップ」として開講した。⁵パラダイム転換前の「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」（後期開講）は HUSA 留学生が来日後の秋学期に開講する派遣前の事前研修として開講し、「HUSA インターンシップ II：実習」は交換留学生を地域企業に2週間派遣する「派遣型」インターンシップとして開講した。派遣型インターンシップで企業に派遣された留学生インターンは、ビジネスで通用する日本語能力の不足と実務経験の不足から、企業内では「顧客」的存在としかかなり得なかった。2週間という短期間では留学生が主体となり仕事をするインターンシップの発展は不可能であり、それが2012年度に新しくパラダイム転換を図った最大の理由である。⁶

新しい「研究プロジェクト型」の「グローバル化支援インターンシップ I：キャリア理論と実践」（後期開講）・「グローバル化支援インターンシップ II：実習」（通年開講）では、留学生インターンと地域企業・官公庁・教育機関がグローバル化社会で共にエンパワーメントできる授業への変革を目指している。大学からは留学生の知見を地域社会の国際化に生かし、地域社会からは社会人の実践知を大学の国際教育に提供する相互支援システムの構築を目指す。本稿では、留学生を大学外の実社会と連携してきた実体験をもとに、多様な価値観を持つ交換留学生の知見を生かしつつ日本の地域社会とつながりを築いていくインターンシップの在り方を模索する。

させる施策を探ることが目的である。

⁴ 交換留学生の大多数は、日本語能力の習得と日本文化理解を目的として日本の大学に留学している。日本の大学への交換留学による意識変容については、恒松（2012c）参照。

⁵ 2003年度より2011年度まで開講した HUSA プログラム留学生向けインターンシップ・コース（授業）を「HUSA インターンシップ」と称する。2010年度と2011年度は、「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」及び「HUSA インターンシップ II：実習」の2コースに分類して開講してきた。

⁶ 2012年6月に University of California, Berkeley にて開催された Global Internship Conference における研究発表においても、数箇月から半年の長期的インターンシップでなければ仕事としては機能しないとの指摘があった。

日本の地域社会における交換留学生インターンシップと日本文化理解

2011年度に行ったパイロット・スタディにより、多国籍の留学生が受講する「グローバル化支援インターンシップ」の授業を日本の地域社会と連携して構築するためには、授業を機能させるうえで機軸となる文化的枠組の設定が必要であることが認識できた。多国籍の留学生で構成される HUSA プログラムの性質を鑑みれば、交換留学生の出身国の多様性から多様な価値観が交錯する場が HUSA プログラムの授業である。その特徴により、グローバル社会におかれた大学が構築可能な文化の多様性を包含した大学の国際性を生かす授業構築が可能となる。本授業は、今日のグローバル社会と日本社会がどう相対すべきかについて考察するとともに、多様な言語と価値観が交錯するグローバル社会で人が共存していくための現実的施策を省察する場となり得る。

交換留学生向け「グローバル化支援インターンシップ」は、まず日本の地域社会と関係を構築することから始まる。そこで機能する文化的価値観に基づいた行動様式を理解することは関係構築の一步である。パイロット・スタディでは、II の実習の授業を日本語中級の HUSA 留学生も受講可能とした。その結果、日本語と英語の両言語を使用可能とするインターンシップの授業がどういった形で進行するかについて重要な示唆を得ることができた。広島大学国際センターでは、初級（レベル 1 と 2）、中級（レベル 3 と 4）、上級（レベル 5）の 5 段階の日本語の授業を開講している。2011-2012 年度の本インターンシップの実習の受講学生は、日本語レベル 3（中級）が 2 人、レベル 4（中級）が 3 人、レベル 5（上級）が 4 人の合計 9 人である。日本語中級の学生については担当教員が日本語と英語の両言語を使用して支援した。

担当教員が日本語中級の留学生の翻訳と通訳を必要に応じて行いつつ仕事を進める方式は、教育現場では機能しても、実社会との連携では機能しないことが明らかとなった。授業での説明や仕事の指示が理解できず、実際に誤解も生じた。大学の国際的性格から、授業ではその多様性を包含しつつ授業を進めることが今日のグローバル社会では重要となる。しかし、日本の地域社会と連携し進める仕事では、ビジネスレベルの日本語と日本社会での礼儀が必要となる現実がある。その現実に合わせて、必要となる言語要件と基本となる文化的基軸の設定を授業で明示する必要性を痛感した。地域社会では基本的に日本語のみを使用して仕事が行われ、人々の行動様式も日本文化を基本とすることが当然の前提として進むため、高い日本語能力を持たない留学生の場合、仕事の遂行が不可能である。実際、日本語能力不足から不理解や誤解も起こった。また、教員が通訳・翻訳を行う役割を担うため、留学生が中級レベルの日本語能力に合わせたインターンシップが実現すると、非現実的な期待を持つ結果を生むことも認識できた。何らかの特殊な技能や知識を持たない場合、常に通訳者と翻訳者が

側近で支援しつつ仕事を行う状況は仕事の現場では稀有であり、日本語能力が上級でない留学生のためのインターンシップは別枠で開拓する必要があるとの結論に至った。

日本の地域社会での仕事現場では、無意識に行われる日本社会での儀礼や作法がある。地域社会と接しつつ構築する本授業では、会議等での対面によるコミュニケーションや電話と電子メールでのコミュニケーション能力が要求される。このような基本的儀礼に基づいて行動できて初めて留学生は地域社会との接点を作ることができる。新「グローバル化支援インターンシップ」を学生主導型で機能させるためには、教員が交渉した後の留学生自身による関係構築の第一歩として、ビジネスレベルでの日本語能力と日本社会での慣習に合わせた行動様式の実践が前提となることは否定できない。留学生の多様な文化的背景を生かして貢献し、その価値を理解してもらえるのは、まず最初の段階で日本社会の価値観への理解を示してからである。

本授業の重要課題の一つは交換留学生が日々授業で学んでいる日本語と日本文化についての理論的理解を社会の現場で実践知として生かす体験を持つことにある。留学生自身も、不安を抱きつつもその挑戦を楽しみにしている。授業の理論的課題は、地域社会のグローバル化支援に関わりつつ社会体験を持つ本授業で、交換留学生の多様な文化的背景に基づく多様な価値観を日本文化的価値観や日本的行動様式とどう交錯させ授業を構築するかである。2003~2011 年度に開講した「派遣型」の「HUSA インターンシップ」では、日本語能力と日本のビジネス習慣や企業風土を理解しようとする態度なくしては、社会体験を持たず即戦力とはならない交換留学生を地域企業や公共機関に派遣することは不可能であり、日本人的態度を身に着けることが前提であった。

交換留学生は多国籍で多様な価値観を持つ学生の集団であるが、地域企業との交渉は日本の地域文化の中で行われる。教員が交渉する言語も日本語であり日本的儀礼が基本的態度となる。交換留学生インターンが、実在し機能している地域文化を尊重しそれを学ぶ態度をまず見せなければ地域からの信頼を得、協力を得ることは不可能である。「HUSA インターンシップ」ではその交渉と調整の役割を担当教員が担う過程で、機能すべき言語と行動様式が定義されていた。では、留学生の多様な価値観を生かす新しい「グローバル化支援インターンシップ」では、どこに行動様式の文化的基軸をおき、多様性の価値をどう位置づけ、それを地域社会で機能している日本文化的価値観とどう関連づけていくべきであろうか。次項よりその背景となる理論について留学生の日本での就労に関する先行研究も含め論じる。

留学生の就職に関する日本企業からの期待と留学生の異文化性

これまでの留学生の日本留学と日本での就職に関する多くの研究は、外国人留学生の就職で日本企業が重要視する条件と採用の理由や留学生の日本での就職に関連する意識調査に関するものに焦点があてられてきた。これらの先行研究から、日本企業が求めている外国人留学生は、「ビジネスレベルの日本語能力を持ち、日本の慣習と価値観を理解したうえで、日本人とは異なる国際的感覚を生かし文化の多様性も理解しグローバルに対応できる人材」に集約できる。つまり、日本社会における行動様式を基本的要素として持ち、異文化に対しても臨機応変に対応できる人材が求められている。第一に日本人らしさ、そしてその上に異質の外国人らしさを生かして支援することを期待されている。

日本企業が重要視する項目として、日本語能力と日本のビジネス習慣や企業風土の理解（神谷 2010）があり、日本的なビジネスマナーを重要視する故、「日本人ビジネスマン化・日本人ビジネスウーマン化」教育を日本の大学で行う結果を招いているとの指摘がある（守屋 2012）。日本企業が留学生を採用する理由として、国際的視点や国際性、留学生の語学力と優れた能力、海外業務の発展、多様な人材など、グローバル化への対応がある。留学生は日本企業に就職する際の自分の役割として、日本語能力の必要性や日本の企業文化や働き方への対応力の必要性を意識している（山田・平田・西頭 2012）。留学生の日本の就職に関する不安要因は、ビジネス日本語能力の不足や日本企業での習慣、会社組織、仕事への価値観、文化的障壁、外国人としての区別、などである（神谷 2010；伊藤，奥村，江崎，高田，中本 2008）。

先行研究から日本企業の外国人採用における優秀な人材要件は、日本語能力が最重要項目であることが分かる。守屋（2012: 31-32）は、日本の大学の外国人留学生への就職支援が日本企業の採用試験の合格を前提とする場合、日本人と同等の適合性を目指すことになり、その結果、大学での就職支援が日本企業が日本において求める外国人留学生像に合わせることになると指摘している。つまり、留学生の就職支援が、日本企業の文化及び風土の理解と日本語運用能力の育成となる結果を招くとの見解である。日本企業が求めるのは、敬語・丁寧語や依頼・苦情対応など、実際の接客や営業、プレゼンテーションで通用しビジネスの現場で通用する高いレベルの日本語である。また、口頭でのコミュニケーション能力のみでなく、電話やメール文書作成など非対面型の日本語のコミュニケーション能力が求められている（前掲）。実際、「HUSA インターンシップ」における派遣先からの要請からも、ビジネスの現場で生かせる日本語能力や日本的礼節の理解が不可欠であったことは否定できない。

金原(2008: 31-32)は、日本企業のグローバル化と留学生教育の方向性の研究において、企業の世界的競争力強化に伴う国際展開に伴い、人材の国際化が求められるようになり、日本人従業員の国際化のみでなく、外国人も視野に入れ、世界規模で人事戦略を練る動きがあることを述べている。優秀な人材要件として、高い専門性や人物評

価値、日本と現地との懸け橋となりグローバル化に対応できる資質と語学力、といった要件に加え、ここでも、業務を日本語で遂行できる高い日本語能力を8割以上の企業が期待しており、採用時は専門性より日本語能力を重視している（金原 2008: 35, 財団法人海外技術者研修協: 2007 参照）。例えば、財団法人海外技術者研修協会（AOTS）（2008）では、留学生が日本企業で就業するためには、(1)ビジネス日本語能力の養成、(2)ビジネス文化・知識の理解、(3)社会人としての行動能力の養成、の3点を包含した研修カリキュラム開発が必要であると提案している（金原 2008:39, 財団法人海外技術者研修協会: 2008 参照）。外国人が日本企業で働くためには「日本人」レベルの日本語能力の習得と日本のビジネス文化の理解とそれに基づく行動様式が要求されるとの強い認識は多くの研究で指摘されている。最近の動向として、留学生よりも日本的価値観を理解している日本人で留学体験がある学生の方が日本への適応力があるため企業は好むとの見解もある。

では、グローバル化社会において日本企業が採用で求める「日本人化」した外国人像は、「グローバル人材育成」とどう理論的に関連づけられるであろうか。日本人的な外国人では異文化性を生かせる人材となりにくいのではないか。この問題は、大学教育で問われるグローバル人材育成は何を目標とすべきかの問いにもせまる。職場での留学生の存在意義は何であるのか。留学生の日本の企業文化についての学習と同様、企業側からも異文化理解の必要性があることについての指摘（神谷 2010）や、外国人留学生の良さは、外国人留学生が持つ日本人学生とは異なる異文化性や個人主義的感性、自己主張の強さであるにも関わらず、それを生かす外国人採用枠を設けている日本企業が少ないとの指摘（守屋 2012: 32, 白木 2008 を参照K）がある。

ここで、大学における留学生の存在意義を再考する機会となる研究を紹介し、職場での異文化性の存在の価値について考察してみたい。外国人留学生が異文化圏で自らの存在が周りから見えにくい存在となり（invisibility）、学生が力を失うこと（disempowerment）について論じた Hsieh(2007)の研究論文を紹介する。アメリカの大学においてグループディスカッション等で発言しない中国人留学生が、自身のアイデンティティを無益で欠如したものと捉えている現実を学生自身のナラティブを通じて語らせることにより、学生の沈黙をその民族的文化や性格に起因するものではないとの論理を展開し、アメリカの大学での教育的環境が留学生によっては力を失わせる環境となり得ると論じている。つまり、一つの独占的な文化的基準をもとに人を評価することへの批判であり、外国人として社会的に制限された中で第2外国語でコミュニケーションをしている留学生の視点から描いた世界である。第2外国語の日本語を使用し日本でインターンシップを体験する交換留学生の視点に置き換えて観察した場合、日本語能力が低く、日本文化的な行動様式を習得していない留学生の存在は日本の文化的価値観を主軸として機能する社会からは見えにくく、重要性の低い存在となる。

「グローバル化支援インターンシップ」において日本的思考が主要な価値観として機能する場合、異文化性が高ければ高いほどマイノリティ的存在となる。地域社会との対応は「日本的な行動様式」を主軸とした価値観で動くため、高いレベルの日本語能力のない留学生の存在感は薄くなる。しかし、「グローバル化支援インターンシップ」がグローバル的な視野から文化の多様性を生かすことに意義を見出すとすれば、日本語能力が高くなく、必ずしも日本的行動様式を習得していない交換留学生の存在とその異質な価値観が見える形にし、その見解も生かす方法を模索する点に本授業の価値が発見できる。では、実際にそれを機能させる授業方法はどうか。次項では、パイロット・スタディから得た現実的施策への示唆について論じる。

パイロット・スタディから見たインターンシップの言語要件

多国籍の交換留学生向けのインターンシップを日本の地域社会と関わりつつ実現させるためには、文化と言語の軸を明確化して授業を機能させる重要性がパイロット・スタディから明らかとなった。「派遣型」の場合、派遣する地域企業に適應する必要があるため、機能する文化的な基軸が「日本」に設定されていた。しかし、「派遣型」から「学生主導型」に移行する過程のパイロット・スタディで、日本語中級でも受講可能として日本語と英語の両言語を使用して担当教員が支援した際、文化的基軸が曖昧となり、異なる行動様式が共存し、価値観のずれを生じさせる構造を生み出した。地域社会とインターンシップの交渉を始める第一歩は、日本的な礼節が基本となることは前述した。日本語中級の留学生を支援するため、担当教員が英語と日本語の両方を使用して通訳・翻訳をすることによるメリットとデメリットをパイロット・スタディからの実体験に基づき、以下に挙げる。

A. 担当教員が日本語・英語の両言語を使用することによるメリット

- 1) 日本語中級の留学生に日本留学中の社会体験の場を拡大できる。
- 2) 日本語中級の学生も、日本語能力不足への教員の支援と日本語上級の留学生との協同学習により、日本語能力の限界に挑戦する機会を持てる。
- 3) 日本語と英語の両言語の能力が高い留学生が通訳の役割を務め、留学生間での相互支援の体験を持てる。パイロット・スタディでは、全学公開の「社会体験者講話」に基づく PBL 協同学習とそのプレゼンテーションにおいて、日本語中級の留学生を日本語と英語の両言語が堪能な留学生が支援した。多国籍の留学生による相互支援を体験することで文化の違いを超えた相互支援により仕事が遂行できるとの実感を持てる。

B. 担当教員が日本語・英語の両言語を使用することによるデメリット

- 1) インターン留学生が、ビジネスレベルでコミュニケーションをとることが不可能なため、翻訳者と通訳者の役割を担う教員に頼る姿勢を持つようになる。メールや書類の翻訳や電話や会議での通訳を常時行う支援員をつけることは現実的には困難である。
- 2) 日本語能力不足により授業内容を十分理解することができないままインターンシップ実習を行う結果を生む。理解不足により誤解が生じる事態も生まれる。仕事の現場での不理解が起こす問題についての認識も不足する。
- 3) 日本語と英語の両言語を自由に使用する環境は、本授業で機能させるべき文化的基軸を曖昧にし、異なる価値観と行動様式が共存する状況を生む。多国籍の留学生が持つ価値観の多様性を日本の地域社会で生きる人々に即受容するよう強要することはできない。実際の地域企業との関係では日本的価値観に基づいた行動様式が求められ、ヒエラルキーや内と外についての概念的理解が根底にある。インターン留学生が時と場により英語で担当教員と話す環境では日本の地域社会との関係で機能する価値観との矛盾が生まれると同時に、日本社会の価値観を理解する重要性の認識が弱まる。⁷
- 4) 翻訳・通訳を行う支援員をつけて仕事を遂行することは、日本社会で仕事をするうえで必要となる日本語能力と授業で期待される学習成果を曖昧にする。さらに、日本の地域社会で仕事をするうえで高い日本語能力が不可欠である厳しい現実を理解する機会を失う。その結果、「期待マネジメント」が適切に行われない結果を招き、自身の能力の過大評価を引き起こし、仕事への非現実的な過度の期待が起こる。仕事の現場ではそれが問題を引き起こす現実を理解する機会を失う。

パイロット・スタディにより、日本語が上級でない留学生がインターンとして実習することは非現実的であることが分かった。問題は、留学生の社会体験の不足、日本社会で仕事をするために必要とされる日本語能力の不足、そして、日本の実社会で期待される日本的価値観に基づいた行動様式の理解の不足、に集約できる。これらの認識不足への対処のための「期待マネジメント」が今後は重要となる。⁸さらに、日本

⁷ 広島大学のおかれている地域で広島大学交換留学生向けインターンシップを開拓した結果、このような結論に至った。日本語の使用とそれに伴う日本文化的な行動様式の必要性についての議論は本インターンシップの範囲内に限定されるものであり、日本の他の地域にまで射程を広げて結論づけることは控えたい。留学生が日本企業で活躍し社内で認められるためには、ビジネスの遂行が可能なレベルの高い日本語能力と日本的価値観の理解が重要であることは実際に日本企業で就労している外国人からよく指摘される。

⁸ 交換留学生向けインターンシップの「期待マネジメント」については別稿で論じる。2011年度のパイロット・スタディに基づき、2012年度に開講した「グローバル化支援インターンシップ」では、

語初級と中級の交換留学生の日本の地域社会におけるインターンシップの開拓方法として、「スクール・インターンシップ」が挙げられる。例えば、文部科学省より「スーパーサイエンス・ハイスクール⁹」の認定を受けた広島大学附属高校における「科学英語表現」の授業や「英語合宿」に留学生インターンがインターン講師として参加しプレゼンテーションを行う体験を持った。2012年度春学期は「科学英語表現」の授業に中国出身の留学生インターン2人が参加し、第2外国語である英語と日本語で日本の高校で講義をすることを目標とし講義を行った。講義を聴く高校生の目標は、留学生による第2外国語でのプレゼンテーションを聴き、外国語でプレゼンテーションを行うことへの意欲を高め、留学生の留学体験や中国の大学生活について学び国際的知見を得ることにおいた。

2012年度秋学期には、「科学英語表現」の授業の英語合宿においてイタリア人学生が“The Walk to Hiroshima”（「広島までの道のり」）と題して広島大学に交換留学するまでの道のりを語り、アメリカ人学生は“American Medical School”（「アメリカの医学部」）と題しアメリカで医学の道に進む方法について英語で講義を行った。留学生のプレゼンテーションの方式を実際に観察し、異質の行動様式や異文化性を学ぶことに価値をおく教育的環境では、日本語が上級でない留学生のインターンシップの開拓が可能であると認識できた。今後は、国際性を求める教育現場で日本語が上級でない交換留学生のインターンシップの開拓を試みる。

日本社会の地域特殊性の理解とグローバル化社会への対応

交換留学生が日本留学中に地域企業でインターンシップを体験する意義は、日本の大学への留学体験を学内での授業の受講のみに終始せず、大学教育で得た学術知を日本の実社会と結び付け実践知として体験することにある。その体験は留学生が日本留学を今後のキャリアに生かす道を探る支援となる。海外でインターンシップをする意義については多くの研究がある。例えば、Vandever and Menefee (2006: 201-202) は、留学体験は日々の慣れた生活環境の枠の外へ出る体験であり、内省により深い学びへと導くと指摘する。つまり、インターンシップを含む国際的体験は、文化と社会の機能や新しい文化に影響を与えている地域的及び国際的問題を認識し、通常の影響の範囲外で他者と関わり会話する体験であると言う。¹⁰ 体験学習(Experiential

受講者を決定する段階から「期待マネジメント」を導入し機能している。

⁹ 文部科学省より「スーパーサイエンスハイスクール」の認定を受けた学校において、科学技術系人材育成を目指し、大学・教育機関等と連携し、独自のカリキュラムによる授業で各地域の特色を生かした課題研究などに生徒が取り組んでいる（独立行政法人科学技術振興機構）。

¹⁰ 交換留学生の日本留学による意識変容については恒松(2012c)参照。インターンシップも含め、HUSAプログラムへの参加が、留学生の世界観や人生観に重要な影響を与えている。

learning)は、学問的学びと異文化での就労体験を統合し、結果として職業人としての価値、態度、経験、技能等が洗練され高められるものであると指摘する(前掲)。この体験学習に関する指摘は、日本の地域社会と関わるグローバル化支援インターンシップにおける HUSA 留学生インターンの体験にも適合する。大学教育で得た学術知を結集し、日本の実社会に対応する挑戦は、留学生に大いに刺激を与え、主体的かつ積極的に取り組む態度へと変容させる。交換留学生が地域社会の人々と関わる仕事に従事することは大学教育の成果を試す機会であり、その挑戦を通じて学生は着実な成長を見せている。¹¹

では、日本社会で期待される価値観や行動様式の地域特殊性とグローバル化社会への対応とのほざまで本インターンシップを理論的にどう位置付けるべきであろうか。例えば、グローバルリーダーシップ・コンピテンシー研究会(2005: 2-26)は、「企業が求めるグローバル人材像」として、1.英語力、2.コミュニケーション {a.発信力(説明力)、b.論理性(分析的思考)}、3.異文化理解、4.倫理性、5.多様性の受容、6.人的ネットワーク構築力、7.自己を知り自信を持つ、8.日本人としてのアイデンティティ、9.マネジメント能力、を挙げている。同時に、企業経営のグローバル化は、言語・文化・宗教などの地域固有の要因と関わり、現地社会で生活する人々の態度や行動に直接影響することから、グローバル化の進展が企業活動に与える重要な影響は「ヒトのグローバル化」に体现されると指摘する(前掲)。したがって、能力評価基準の開発においても、実際の多国籍企業で画一的な評価尺度を開発するのみでは、各国で仕事に対する価値観、就業形態、現地の環境要因などに基づいた文化的多様性があることから、各地域で軋轢が生じる可能性もある。つまり、地域特性、企業規模、組織特性など、同じ企業の傘化にあっても地域や規模により組織文化や特性が異なることの理解は不可欠であり、個人の能力と地域特殊性や組織環境との適合性を評価できる尺度の開発が必要とされる(グローバルリーダーシップ・コンピテンシー研究会 2005: 7-11)。

グローバル人材育成において地域特殊性の理解が不可欠であることは、短期交換留学生向けインターンシップを地域社会で実現させるうえでも担当教員が経験したことである。日本文化に基づいた地域特長的な価値観と行動様式及び礼儀を理解して担当教員が地域企業と交渉し、留学生インターンが同様の態度を習得しようとする姿勢を見せることは必須であり続けた。経営の現場では、グローバルに汎用的なコンピテンシーの導入のみでは現地経営のマネジメントは困難であり、「コンピテンシーの地域特殊性」の理解が現地における業績向上に影響を与える(前述)との指摘は、本イン

¹¹ 例えば、インターンとして仕事をする上での服装や礼儀の重要性についてテキストを使用して授業で理論的に理解しても、実践の場では応用できていないことが多い。実践を通じて現場で学ぶ重要性は計り知れず、留学生は実践での指導により着実に変容を遂げている。

ターンシップについても同じく指摘できる。日本の地域社会で機能する文化的価値観を理解しつつ、インターン留学生の持つ多様な価値観をいかに生かしていくかが交換留学生インターンシップの理論的課題となる。

ここで、構築主義的文化概念に基づいた新しい文化概念の視点から「日本文化」概念の曖昧性について考察し、日本文化の概念がどう構築され影響を及ぼしている可能性を持つのかを考察する。千田（2001: 4）は、構築主義の指標として、社会を知識の観点から検討する志向性、その知識は人々の相互作用によってたえず構築され続けていることの自覚、知識は広義の社会制度と連携していることの認識、を挙げる。つまり、客観的現実の存在を批判し、各自が外界との相互作用により自分の現実を構築しているとの立場である。構築主義の立場に立てば、客観的定義に基づく「日本文化概念」は存在せず、「日本文化」が多角的に多くの場で構築され語られる過程で曖昧かつ流動的に解釈されることとなる。

例えば、箕浦(2012: 93)が述べるように、グローバリゼーションとデジタル革命の進行により、「土地に結びついた」文化概念は成立しなくなり、人々・資本・物資の国を越えた移動により、土地に結びついた文化概念は、グローバル化時代を生きている人々の現実を反映しなくなったと言える。このような変化により、文化は、人々の思考、行為、価値判断やコミュニケーションのプロセスのなかで構築され相互作用により絶えず変容するため、流動的で雑種的なものと概念化されると箕浦（前掲）は論じ、「構築主義的文化概念」と称している。原子共同体・近代社会・情報社会への移行に伴う共同体と時間性の変化の議論（濱野・佐々木 2011: 36-58）は、日本社会がグローバルな文脈でどう解釈されているかを再考させる。そして近代社会以前のコミュニティでは、時間と場所が共有されてその共同体の中に埋め込まれ、「生きられた共時性」として時間的特性が存在していたが、近代社会の発展と共に脱埋め込み化が起こり、時間的概念は複数のコミュニティが共有可能なものへと変化する。そしてソーシャルメディアの発達した情報社会では、再び同期的な時間性が選択的に生成され、時間の共同体への再埋め込み化が起こると述べる（濱野・佐々木 2011）。

デジタル空間により世界中の人々とのコミュニケーションが、絶えず国境を容易に移動し可能となった現在、人を取り巻く外界との相互作用によって各個人の現実が作られると認識する構築主義の解釈は、文化概念の複雑性と曖昧性を認識させる。人は、各個人による身体を取り巻く環境との相互作用のみではなく、身体的位置とは無関係にインターネット上で時空を超え影響を受ける環境にさらされている。つまり、現実を構成する要素の多角性と空間の多面性がより複雑な現実を生む。同時に、土地との密着性の要素は日本文化の概念的理解においては薄れていっている可能性は高い。ソーシャルネットワークなども含むデジタル空間の発展は、日本の土地と結びついた共同体としての日本社会の持つ意味を変容させる。場と時間と土地と密着した関係性が

曖昧になり、共同体への所属が不明瞭になる状況が生まれる中、地域社会との接触と信頼関係の構築が鍵となる本インターンシップにおいては、地域の人々との関係性の在り方やコミュニケーション方法について、担当教員が留学生の解釈を確認しつつ授業を進めていく必要がある。

土地に結びついた文化概念が、デジタルが構築する世界をも包含するグローバル社会を生活している人々の現実を必ずしも反映しない現在、本インターンシップにおける地域社会との関わりは留学生にどう映るのか。インターネット空間で構成された異空間との狭間で日本社会が再構成され、「場」の理解がより不明瞭となっている可能性もある。デジタル時代は、日本の礼節や日本的コミュニケーションの形態さえも、地域社会と密着した場所から離れたデジタルの世界で異なるコミュニケーション方法により再構築されている可能性がある。実際に「場」を移動しないデジタル空間においては、日本社会でのコミュニケーションで設定される「内と外」や「公と私」の境界も不明瞭となりがちであり、対面した場合とは異なるコミュニケーション方法と空間が形成され、留学生の日本社会におけるコミュニケーション方法の理解にも影響を与えている可能性もあろう。

結語

交換留学生インターンは、主に日本語と日本文化への興味から日本の大学に交換留学している。インターン留学生は高い日本語能力の習得と日本的な行動様式を学ぶことに強い関心を持ち、その習得により自分が将来日本とつながる道を開くとの認識を持っていることが授業への態度から伺える。¹² 留学生向けインターンシップは、留学生を日本人化するパラダイムに陥りがちであるが、交換留学生を「日本人化」するのみでは、「グローバル化支援インターンシップ」に多国籍の留学生が関わる意義が弱まる。異文化間の相違を理解する過程で、自文化中心主義(自民族中心主義, ethnocentrism)から多様な価値観や行動様式を文化の多様性として捉えることのできる思考(ethnorelativism)への移行について、Olson and Kroeger (2001)が論じている。

留学生を日本社会に適応すべく教育し日本人化を図ることは、日本人的な世界観で構成される現実を中心的視点とする自文化中心主義に陥る可能性がある。各文化は相対的なものであり、一つの文化が絶対的な行動規範となるわけではないことを理解し、

¹² 「グローバル化支援インターンシップ」のPBL協同学習で、異国の文化で仕事をしたい人はその文化理解が不可欠であり、自国の文化を忘れることが大切であるとの意見を述べた留学生がいた。その留学生の見解では日本社会への適応を最重要視していることが伺える。他の留学生からは「自分とは何か」という原点が大切で、異国文化に適応するのみでは自分自身のアイデンティティがなくなるという意見もあった。異文化圏におけるインターンシップの理論的分析はアイデンティティとも関わる課題であると考える。

文化の多様性と文化間の相違に価値をおけるようになることを意味する“ethnorelativism”に立脚するのであれば、「グローバル化支援インターンシップ」は、多様な価値観を尊重しつつ、留学生の知見を生かした日本の地域社会のグローバル化支援となる授業として発展する意義を見出せるのではないか。テュルパン・高津(2012)は、変化を恐れず他者や異文化に心を開く重要性を説き、ビジネスのグローバル化には、地球規模の広い視野と長期的な事業構想、文化や言語を超えて構想を実現するマネジメント力が必要であると論じる。日本企業にはそれが欠けているためにグローバル化でつまづくのだと論駁する。

交換留学生インターンはデジタル空間が構成する世界も生活の一部とする世代でありつつ、日本文化と伝統への強い関心を持つ学生である。「グローバル化支援インターンシップ」の授業が受講できる日本語上級の交換留学生は HUSA プログラムの一部であり、大多数の HUSA 留学生は、日本語能力が初級と中級であるため日本語でインターンシップをすることは不可能である。今後の大きな課題は、それらの交換留学生と日本社会とをどう結び付けていくかである。世界各国から集まった HUSA プログラム留学生の持つ文化的多様性と多様な言語能力を生かした学生間の支援システムの構築は、インターンシップの発展のためのみでなく、将来多角的な支援システムとなり得るグローバルネットワーク構築にもつながる。

本年度より日本人学生支援員による支援システムを導入し、日本人学生と交換留学生がともにグローバル・リーダーを目指せる授業を構築するシステムの試行中であり、その成果の検証もしつつある。交換留学生インターン・日本人支援員・地域社会の相互支援システムは、インターンシップを機能させる原動力となるものであり、本年度より学生を主体としエンパワーメントを促進するパラダイムへと転換を図った意義はそこにある。本授業はまだ作動し始めたばかりである。試行錯誤と省察的实践により、地域社会と協力しつつ、交換留学生向けインターンシップの授業を日本人学生も参画し共にグローバル社会で生き抜く力をつける授業へと発展させていく。

引用文献

- 伊藤孝恵・奥村圭子・江崎哲也・高田谷久美子・中本康一郎 (2008) 「留学生の卒業後の進路と日本での就職活動に関する意識 -山梨大学留学生センター『留学生の進路希望調査報告書』を基に-」『留学生センター紀要』第4号, pp.29-42.
- 金原菜穂 (2008) 「日本企業のグローバル化と留学生教育の方向性」『群馬大学留学生センター論集』第8号, pp.31-44.
- 神谷順子 (2010) 「日本における外国人留学生の就業に関する研究 -大学・企業・行政との連携による就職支援の効果-」『北海学園大学学園論集』第143号, pp.67-91.
- 木村有伸(2009)『異文化適応』論の中の日本人特殊論について』『立命館国際研究』第22号2巻 October, pp.221-242.
- グローバルリーダーシップ・コンピテンシー研究会(編)(2005)『パフォーマンスを生み出すグロー

バルリーダーの条件』白桃書房

- 財団法人海外技術者研修協会 (2007) 『平成 18 年度構造変化に対応した雇用システムに関する調査研究 (日本企業における外国人留学生の就業促進に関する様式研究) 報告書』
- 財団法人海外技術者研修協会 (2008) 『平成 19 年度産業競争力評価高度人材育成事業 (アジア人財資金構想共通カリキュラムマネジメントセンター事業) 報告書』
- 杉本良夫・マオア,ロス (1995) 『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫
- 千田有子 (2001) 序章「構築主義の系譜学」上野千鶴子 (編) 『構築主義とは何か』勁草書房 pp.1-41
- テュルパンドミニク・高津尚志 (2012) 「なぜ、日本企業は『グローバル化』でつまづくのか - 世界の先進企業に学ぶリーダー育成法 -」日本経済新聞出版社
- 恒松直美 (2012a) 「大学教育と社会の相互支援を目指した短期交換留学生インターンシップ-『グローバル化支援インターンシップ』パイロット・スタディー-」『広島大学国際センター紀要』第 2 号, pp.1-15.
- 恒松直美 (2012b) 「省察的实践と『グローバル化支援インターンシップ』-フェミニズム理論とエンパワーメントのパラダイム-」『広島大学留学生教育』第 16 号, pp.1-15.
- 恒松直美 (2012c) 「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』第 17 号, pp.51-60.
- 独立行政法人科学技術振興機構 『スーパーサイエンス・ハイスクール (Super Science High Schools, SSH)』 <https://ssh.jst.go.jp> (2013 年 1 月 6 日最終アクセス)
- 濱野智史・佐々木博著, ソーシャルメディア・セミナー編 (2011) 『日本的ソーシャルメディアの未来』技術評論社
- 箕浦康子 (2012) 「『異文化間教育』研究という営為についての 2、3 の考察 - パラダイムと文化概念をめぐって -」『異文化間教育』第 36 号, pp.89-104.
- 守屋貴司 (2012) 「日本企業の留学生などの外国人採用への一考察」『日本労働研究雑誌』(特集「グローバル経営と人材育成」) 第 623 号, June, pp.29-36.
- 山田明子・平田実・西頭由紀子 (2012) 「外国人留学生の日本企業への就職に関する意識調査-工学系大学院生を対象として-」『九州大学留学生センター紀要』第 20 号, pp.11-33.

Global Internship Conference, University of California, Berkeley,

<http://www.globalinternshipconference.org> (2012 年 12 月 28 日最終アクセス)

Hsieh, Min-Hua. (2007) Challenges for International Students in Higher Education: One Student's Narrated Story of Invisibility and Struggle. *College Student Journal*, 41 (2) June, pp.1-19.

Olson, C. L. and Kroeger, K. R. Global Competency and Intercultural Sensitivity. *Journal of Studies in International Education*, 5, pp.116-137.

Vandever, R and Manefee, M. L. (2006). Study Abroad, International Internship and Experiential Learning: A World-Class Adventure in Learning, Proceedings of Southwest Decision Sciences Institute, Oklahoma City, OK, pp.200-207.

謝辞

2012 年 6 月にアメリカの University of California, Berkeley にて開催された Global Internship Conference に参加した際、参加者の皆様より本インターンシップについて多くの示唆をいただいた。ここに感謝の意を表す。